

心包・三焦の謎解きと祈り・祭祀に果たす役割

田 中 実^{*} (六角田中医院)

Solving the Mystery of Shinpou and Sanshou and their roles in Prayer and Religious Service

Minoru TANAKA (Rokkaku Tanaka Clinic)

要旨：発生学的に、細胞では細胞膜が内部陥入して核膜や細胞小器官の膜を形成すると共に、原始本能的脳として機能する。相似的に、人体では表層細胞層（広義の皮膚）が内部陥入して腸（原腸）さらに諸内臓を形成し、原始本能的・情動的・直感的脳として機能する。このような脳として振る舞う細胞膜や皮膚・腸・内臓が、「心包・三焦は共に名ありて形なし」、「三焦は孤腑、全身をつなぐ油膜」等とされてきた心包（六番目の臓）や三焦（六番目の腑）の実体と考えられることは既に報告した。本報告では、両手両上肢から前胸部の膻中穴へとつながる心包・三焦両経のルートに関する考察を通じて、両臓腑が前傾合掌に象徴される祈りや祭祀そして天人合一（東洋賢^{註1}学の理想）への道を開くうえで重要な役割を果たす可能性を述べる。

キーワード：心包、三焦、祈り、祭祀、細胞生物学、人体発生学

Abstract: From the viewpoint of embryology, cell membranes invaginate the inside of a cell and also form membranes around the nucleus and various organelles, which function as primitive-instinctive brains. Similarly, the surface cell layer (the skin in a broad sense) invaginates the inside of the body, forming the gut (primitive gut) and other various internal organs, which function as primitive-instinctive, emotional and intuitive brains. The author has already reported that these cell membranes and the surface cell layer are equivalent to the Shinpou (sixth viscera) and Sanshou (sixth entrails) in traditional oriental medicine, which are said to “have their own names, but remain intangible”, and Sanshou is “lonely entrails” or “an oily membrane connecting the whole body” etc. In this study, the author reports the possibility of the important roles of Shinpou and Sanshou in prayer and religious service and also the path to Tenjingoutsu (an ideal in original traditional oriental medicine) through a considering of the meridians of Shinpou and Sanshou, which distribute from both hands and the upper limbs to the acupuncture point Danchu in the middle of the chest.

Keywords: Shinpou, Sanshou, Prayer, Religious service, Cell biology, Human embryology

※〒604-8133 京都府京都市中京区六角通東洞院東入 藤屋町183-1
e-mail: yff49229@nifty.com

はじめに

五臓六腑の語はよく知られているが六腑目の三焦とは何か、また六腑に対応する六腑目の心包（この場合は六臓六腑と言う）とは何かについて定説はない。そこには「心主（心包）は三焦と表裏を為し共に“名ありて形なし”（難経25難）」³⁾、「三焦は表裏関係を為す特定の臓を持たない“孤腑”（靈樞・本輸篇）」⁴⁾、「三焦は身体の上内外をつなぐ油“膜”（血證論）」⁵⁾等、古典記載の難解さがあったと思われる。心包については単純に“西洋医学で言う心臓を包む心外膜”とされがちであるが、それは西洋医学の局所解剖学的な思い込みによるものであり、西洋医学で言う心外膜は東洋医学で言う心包の一部ではあっても東洋医学で言う心包そのもの（心包のすべて）とは考え難い⁶⁾。これについては、I、2、(2)心包で述べる。

このような謎の臓腑ともいべき心包・三焦について、細胞生物学や人体発生学そして近年の皮膚・腸・内臓に関する生理学等の観点から一応の謎解きを試み、両臓腑が皮膚感覚・腸感覚・内臓感覚等と密接不離であり原始本能的・情動的・直感的機能等の土台をなすこと、そして天人合一（東洋医学の理想）のための重要な臓腑であると考えられることの概略は既に報告した⁶⁾。

ただ、心包・三焦の経絡を含めた総合的観点からの解明は次なる宿題であった。本報告ではその宿題を解く過程で、心包・三焦がその経絡を含めて、原始本能的・情動的・直感的機能に加えて、前傾合掌に象徴される祈りや祭祀そして天人合一への道において重要な役割を担う可能性が明らかになったことを述べる。

I. 心包・三焦とは何か

1. 細胞生物学と人体発生学

永田和宏著『生命の内と外、－ヒトは「膜」である－』によれば、細胞レベルでは細胞膜が内部陥入して核膜や細胞小器官を形づくって内部展開しており、細胞とは細胞膜から成るものであり細胞内は細胞外でもあることになる⁷⁾。

また、ブルース・リプトンは細胞膜membraneとは脳mem“brain”であり、膜に存在する内在性膜蛋白質のうちのレセプター蛋白質によって環境からの情報を受けとり、エフェクター蛋白質によって反応し、環境に適応して生命活動を営むとする⁸⁾。興味深いことは、このレセプター蛋白質は物質的環境情報だけでなく、光・ラジオ波・思考その他種々の振動エネルギー等の非物質的環境情報にも反応することである⁸⁾。核膜を持たずもちろん脳もなく細胞膜に囲まれただけの原核細胞が周囲の環境情報に反応して生存できる所以である⁸⁾。永田とリプトンは図らずも三焦と心包の本体を明らかにしていたのである。

相似的に人体発生学においても、細胞膜にあたる表層細胞層（広義の皮膚）が内部陥入して原腸ができ、そこから内臓の芽が出て内部展開する（図1、2）⁹⁾。東洋医学で九竅（九つの穿った孔）の語があるが、一般の辞典に記載はないものの、七番目（各二つの目・鼻孔・耳孔に次ぐ）の孔である口の延長線上に胃があることを膚の字が、九番目の孔であることを尻の字が示すように見える。そして、広義の皮膚・腸・内臓は脳でありこころの在処でもあることが分かってきた^{6, 10, 17)}。ただし、この場合の脳やこころは原始本能的・情動的・直感的あるいは超能力的なもので、大脳では大脳辺縁系や間脳（視床・視床下部・下垂体・松果体）・小脳等と関連しているように思われる^{6, 10, 17)}。

まとめると、細胞とは細胞膜の陥入によって細胞小器官が形成され、内外が一体となって物質的・非物質的環境情報の中で生命の営みがある、人体では広義の皮膚と見做せる体表細胞層の内部陥入により皮膚・腸・内臓が形成され、内外が一体で物質的・非物質的環境情報の中で生命の営みがある、となる。

2. 心包・三焦の形態と機能

(1) 三焦

六臓として明確な位置づけがなされなかった心包（一般には“五臓”六腑と言われる）に対して、六腑として明確に位置づけられてきた三

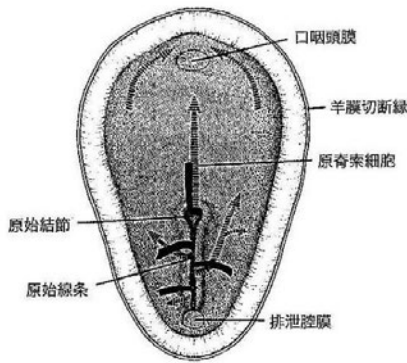


図1 胎生16日の原腸発生図
「ラングマン人体発生学第8版」⁹⁾ p.62

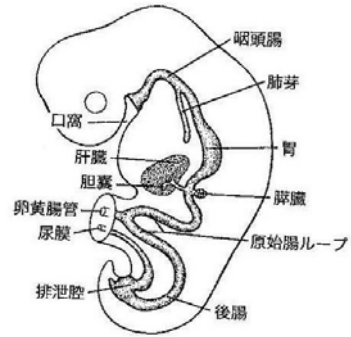


図2 胎生28日を過ぎた頃の胎児
「ラングマン人体発生学第8版」⁹⁾ p.94

焦について先に述べる。三とは全身の上中下を表す三のことで、広義の皮膚と見做せる表層細胞層という膜が九竅から内部陥入して体中に展開することを意味するものとする。換言すれば、三焦とは五臓五腑を包括的に形成する存在である。丁度、細胞膜が種々の細胞小器官を包括的に形成するのと同じである。これが三焦が「表裏関係を為す特定の臓を持たない“孤腑”（靈樞・本輸篇）」⁴⁾、「身体の上内外をつなぐ油“膜”（血證論）」⁵⁾等と表現された所以である。三焦の焦は焦げるの焦で、熱エネルギーであり膜の動力源・エフェクターであると考えられる。

(2) 心包

心包とは、「心主（心包）と三焦は表裏を為し、ともに“名ありて形なし”（難経25難）」³⁾と記載されるように、膜におけるエフェクターとしての三焦と表裏一体の物質的・非物質的環境情報に対する膜におけるレセプターであると考えられる。心包は“西洋医学で言う心臓を包む心外膜”と解されがちだが、これは西洋医学的発想の刷り込みによるもので、東洋醫學的には三焦と表裏一体で全身を膜状に“包む心”^{しん}と考えるのが妥当と考える。西洋医学で言う心外膜はあくまで東洋醫學で言う心包の一部である。例えば、温病における全身性の高热で意識障害・うわごと・狂躁状態等が生じた場合、熱入心包^{うんびょう}と言っても熱入心とは言わない。何故なら、これは西洋医学で言う心外膜の熱のみならず東洋醫學で言う全身を包む心である心包の熱だからで

ある⁶⁾。

(3) 五臓六腑と六臓六腑

六臓六腑とする場合は六臓目は心包で六腑目は三焦となり、経絡を含めて両者は表裏を為すが、そもそも両者は全身の内外を包み展開する表裏一体の膜という“無形の形”なので、内部が中空の腑（例えば胆・小腸・胃・大腸・膀胱の五腑のように）とは言い得ても内部が詰まった臓（肝・心・脾・肺・腎の五臓のように）とは言い難い。そこから六臓六腑ではなく、五臓六腑の名が定着したものと考える。ただ、心包を五臓五腑全体を包む三焦と表裏一体の“膜状の臓”と観れないこともなく、特に鍼灸での心包・三焦両経絡の表裏関係を考慮すれば六臓六腑の呼称も可となる。

因みに、後述する図11十二原之表（難経鉄鑑）では、“三焦は五臓六腑を経歴する”と記載されるもその経絡は心包を含む六臓六腑の十二経絡となっている。五臓六腑と六臓六腑が併記された形である。

(4) 膜原（募原）

膜の原（広野）が膜原、募（招き集める）の原（広野）が募原で同義語である。呉又可が温疫論で、「表（体表）から遠くなく胃（裏）に近く、すなわち表裏の境界であって半表半裏のところである」¹⁸⁾と言うように、中央に食道裂孔のある広野である横隔膜部が膜原と解釈できる⁶⁾。七番目の竅である口から食道裂孔までは表（太陽）で、裂孔を過ぎた胃からは裏（陽明）

とあり、『中日大辞典』には「②こころね」とある。

以下のような皮膚・腸・内臓に関する知見は、そのまま心包・三焦についても当てはまると考える。

「プラセボ効果、末期がんを含む不治の病の自然治癒、熱く焼けた石炭上を素足で歩く、キネシオロジーで身体が本来もつ治癒能力を引き出す等は思考を含む目に見えないエネルギーに反応する脳として働く細胞膜による」⁸⁾、「皮膚は第三の脳、偏在する脳、皮膚科学から眼以外の視覚・テレパシー・以心伝心・目利きの本質等の超能力を考える」¹⁰⁾、「皮膚は脳と同じ受容器を持つ、こころの健康も皮膚から、消化器系神経研究者のカーションは消化器を第二の脳と呼んだが皮膚は第三の脳である」¹¹⁾、「表皮には中枢神経と同じ情報処理のための分子機械がある、そこ(皮膚)に意識や生体活動の基盤があるように思える」¹²⁾、「皮膚がこころあるいは脳の役割を果たしている、皮膚は露出した脳である」¹³⁾、「W.ジェームズは感情を生み出すのは内臓の変化であると主張したがむしろ皮膚感覚の変化だ、肌感覚が性格になる、直感や内臓が生み出す」¹⁴⁾、「腸は小さな脳、腸の超能力」¹⁵⁾、「心肺同時移植でこころが変わる、生命の本質のこころや魂が腸管内臓系の五臓六腑に存在するとなれば脳死をヒトの死とする臓器移植の条件がご破算になる、自我が存在する腹の腸」¹⁶⁾、「はじめに腸ありき、腸の神経に脳が似ている、内臓感覚が情動を生み出す」¹⁷⁾、その他諸々である。

筆者は、これらの研究にヒントを得、東洋醫學的観点を導入して心包・三焦の謎解きを試みた。地震前の野生動物の避難行動、鳥や魚が集団で大きな鳥や魚のように飛び泳ぐ、鳥の渡りや魚・鯨の遠距離回遊、心包経を中心に肺経・心経そして表裏をなす三焦経を中心に大腸経・小腸経等の腸管内臓系の手の経絡に絡む感情の交流と見做せる握手や臍中を加えた場合のハグ、肝鬱等で生じた内熱を心包経から洩らしてこころのバランスをとる瀉血行為と見做せるリストカット等も心包・三焦によって説明可能である⁹⁾。

図7はストレスによる肝鬱・心労で心包経に見られた発赤、図8A・図8Bは多忙とストレス・心労で心包経と三焦経共に見られた発赤で、何れも情優位傾向と考えられる女性である。十二経絡図では経絡は線状に描かれているが、経絡の気が滞って鬱熱すると心包経を中心に円状の発赤として現れると考えられ、リストカットで幅数cm程度の傷跡が残される所以であろう。因みに、胆経に現れる円形脱毛症や帯状疱疹等も線状ではなく円状である。

Ⅱ. 心包・三焦が祈り・祭祀に果たす役割

心包・三焦の形態と機能については以上のとおりであるが、以下に心包・三焦が祈り・祭祀に果たす役割について述べる。

1. 祈り・祭祀の形は中心帰一

(1) 身体の形は前傾合掌

祈り・祭祀の身体形は、時代・地域・宗教・宗派を問わず、基本的には図9のような前傾合



図7 心包経の発赤



図8A 心包経の発赤



図8B 三焦経の発赤

掌であり、これは心身の両面から中心帰一の形であると考えられる。「氣とは器であり形である」²⁰⁾が、前傾合掌は神仏や祖先・死者等先に旅立った人々に対する敬虔なこころと表裏一体で、図10の胎児の姿を考え併せると普遍的かつ先天的・本能的なものと思われる。

図11は難経66難の十二原之表（難経鉄鑑）¹⁷⁾であり、三焦が全身十二経絡をつなぐことを示す²¹⁾。腎間動氣は人の生命であり十二経の根本であるが故に原（三焦之尊號でもある）と呼ばれ、三焦はその別使として五臓六腑を経歴すると共に五臓六腑に病あれば皆その原を取るとされる²²⁾。原は身体を中心であり、臍下丹田や背側の三焦俞、胎児では臍=神闕に通じるもので、原方向に向かう前傾合掌は中心帰一の身体形と観ることもできる。さらに、原が身体を中心であるならば、こころの中心は臍中と観ることもできるので、臍中の前での前傾合掌はこころと身体の双方にとっての中心帰一の形であるとも言えよう。

(2) 集団の形は扇型

社寺に祀られている神仏（主祭神・本尊）や教会での十字架のイエス、仏壇の先祖に向かつての祈りや祭祀は、集団で催される場合は物理的にも心理的にも中心帰一の扇型となることが観てとれる。

(3) 心包経・三焦経との関係

(1)に述べた臍中の前での前傾合掌は、図4、5、6のように心包経・三焦経・臍中が中心になって、こころと身体を中心帰一の形をとる。また腹が全身の縮図であるように（図3）手も全身の縮図である故（第3指は頭顔面部と頸部、

第2・4指は上肢、第1・5指から手首中央までは下肢、手相で言う手掌の上部1/3辺りを斜めに横切る知能線の上部は胸部で下部は腹部に相当）、合掌は両手を温めると同時に五臓六腑全身にも氣血を巡らせ温めるので、こころ安らかなりラックス効果もあり中心帰一に相応しい形と言えらる。

(4) 中心帰一の意味と意義

中心帰一は中心が定まるので回転すると円運動となり、円滑・円満そして氣血が循環して心身共に円く収まる健康につながる。健康Healthの語源はHeal（癒す）・Whole（全体の）・Holy（神聖な）等と同じくギリシャ語のHolosで「全体」の意味であるが、それは形で表すと円となる。円は聖アウグスティヌスが「神の本質とは至るところに中心がありどこにも円周がない円である」と言ったように神にもつながり、それは無限絶対無始無終の宇宙（一つにuni回るものverse）につながることもである。

筆者は「生命とは中心帰一の回転コマ運動をする円・球である」としてそれは太極図で表現できるとし、人の場合は天人相応太極円通図で表現し、回れば健康で回らなければ不健康・病であるとしている（図12）。

心包・三焦を通じての祈りや祭祀は生命本来の中心帰一の回転コマ運動をもたらし、それが霊・心・体そして社会の健康につながるのである。近代医学では祈り・祭祀は非科学的なものとして医療の俎上に載ることはなかったが、心包・三焦の謎解きによって本来の医療の重要部分として復帰できると考える。



図9 マザー・テレサ



図10 胎児

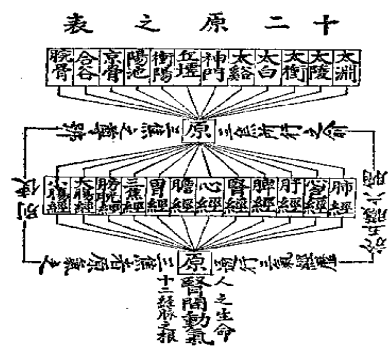


図11 十二原之表（難経鉄鑑）²¹⁾

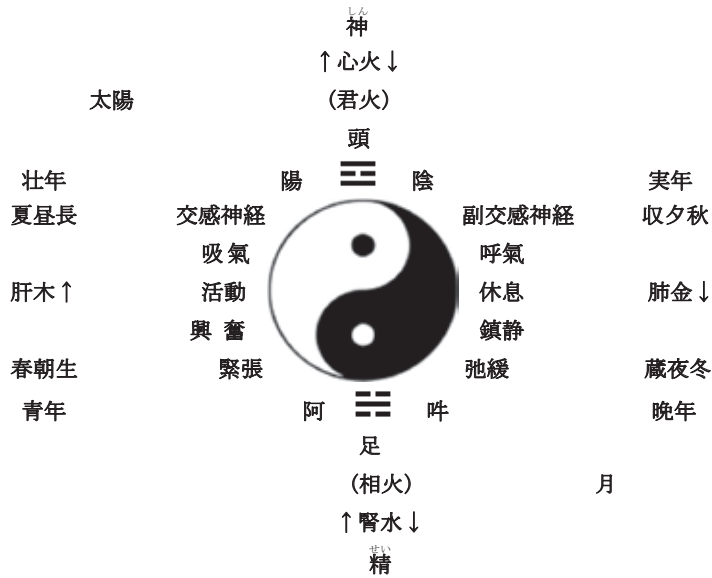


図12 天人相応太極円通図

中央が脾土、口→肛門：腸

白い御玉杓子の中の●：上丹田 口につながる

黒い御玉杓子の中の○：下丹田 肛門につながる

回れば健康、回らざれば不健康・病

☲：易の離卦で縦にすると火の字となり上下二つの陽卦が君火

☵：易の坎卦で縦にすると水の字となり中の陽卦が相火

霊は元々円通している

心は観自在で円通する

心が円通すれば体の氣血も円通する

霊・心・体すべてが円通すれば健康

青年・壯年・実年・晩年のリズムは輪廻転生にもつながる

宇宙 = Uni (一つに) verse (回るもの) ⇔ 神

因みに、太極図は横軸に伸ばすと“波の動き”つまり波動図となる。万物万象は素粒子から大宇宙まで、粒子として回転すると同時にその回転は太極図で示される陰陽によるものなので、波動を同時に発していることになる（図13）。こころも“波長が合う”等と言われるように波動であり、太極図が基本形になると考えられる。つまり、太極図はこころを含む万物万象の姿・形・動きを表すもので、こころと物質が同根であるとの認識をもたらすが、それは今後の医療において様々な可能性を広げることになるかもしれない。

中心帰一が生じる理由は、陰陽の勾玉が惹き合うところ（広義の愛と考える）にあるが、この太極図に読み取る生命とは生物学的な生命に

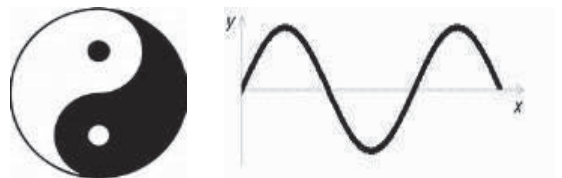


図13 太極図と波動図

止まらず、宇宙のミクロからマクロに至る万物万象のことを指す広義の生命であり、古くはウロボロスの蛇（輪）で示されたものであると考える（図14）。

雛型思想や部分即全体の思想からは、個々人の心包・三焦を通しての祈りと祭祀は万物万象万人に至るまで影響をもたらし得るのである。

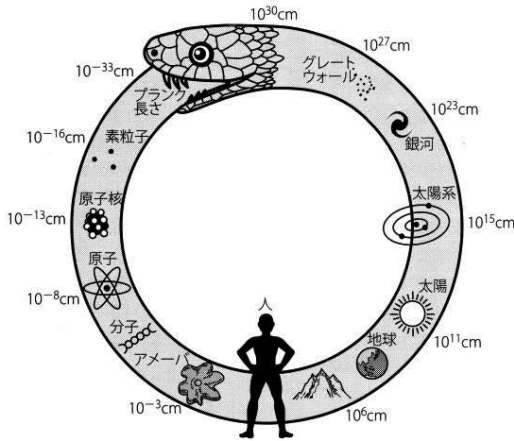


図14 ウロボロスの蛇 (輪)

2. 祈り・祭祀は心包・三焦を介する根源回帰

祈り・祭祀は、生命宇宙論的には例えば日本人の場合なら生命の根源たる親から先祖さらに遡って産土神うぶずながみ (地域の母なる大地) → 須佐之男命すさのおのみこと (海・地球) → 月読尊つくよみのみこと (月) → 天照大御神あまてらすおおみかみ (太陽) → 天之御中主神あまのみなかつぬし (宇宙)^(註2) という、より根源の神々・宇宙への回帰を、意識論的には顕在意識の奥の潜在意識 → 集合的無意識 → 宇宙意識あまらしき (阿摩羅識)^(註3) といった根源意識への回帰を、心包・三焦を通して為すものと観てとれる。

3. 祈り・祭祀は宗教の様式であり本能

宗教とはRe (再び) ligion (結びつけること) であり、地上生活をするなかで分別知に包 (包み → つつみ → 罪) まれてしまった根源の真我と、分別知主体の表層の自我とを、再び結びつけることである²⁴⁾。また、根源の非個別真我たる天 (宇宙) と表層個別自我が生まれ生きる地 (即ち天と地) を結び、真我と自我の合一を意味するのが巫字で、これを土台にするのが医の古字である醫であり、神 (天) と人 (地) を仲介 (“medi” ate) するのが “medi” cine であると考え²⁵⁾。

祈り・祭祀は中心帰一の根源回帰の営みであると見做せる宗教の様式であり、本来の能力である本能つまり「生まれつき持っていると考えられる行動の様式や能力『広辞苑』」でもありと考える。そこに、心包・三焦が関わっている

ことになる。

4. 天人合一と醫療のシンボル・アスクレピオスの杖

例えば、心包・三焦と関連する腸の傍である易は「日+一+月」で、最も身近な天である太陽と月が上下に配されている。精進料理や断食により腸が活性化すると太陽や月に象徴される天との共鳴が起き、東洋醫學の理想・目的とも言える天人合一に近づける。腸の源である皮膚はもちろん腸の内部展開たる内臓もまた太陽や月そして天の波動を受けており、皮膚感覚・腸感覚・内臓感覚の活性化は即ち心包・三焦の活性化であり天人合一につながることになる。天人合一とは、天の属性である感性・直感・原始本能・宗教等と、地の属性である知性・分別知・理論・科学等の陰陽論的一円融合のことであると考える。

私見であるが、世界保健機関の旗等に使われる醫療のシンボルであるアスクレピオスの杖 (図15) は、地を象徴する蛇が天に向かって天人合一を目指す姿であると考えられる。キリスト教では蛇はサタン (Satan) の象徴とされるが、Satとは土星 (Saturn) や土曜日 (Saturday) のSatと同じで土つまり地の象徴と観ることができる。天と地を仲介 “medi” ateするのが “medi” cineであり、巫を土台とする醫であると考えれば、medicineと醫の整合性もとれるしアスクレピオスの杖が医療のシンボルである理由も納得できよう。



図15 世界保健機関の旗

大百科事典」。

結び

これまで謎であった心包・三焦の実体は、近年の細胞生物学や人体発生学そして経絡の考察により、今回とりあげた祈り・祭祀における役割を含めて基本的なところは概ね解明できたのではないかと考える。これにより、道教・儒教・仏教を土台とし天人合一を旨とする本来の東洋医学、神と人を仲介する本来のmedicineの本質が見えてきたと思う。今後、心包・三焦の再確認と活用に伴って本来の医学medicineが再認識されることにより、原始本能的・情動的・直感的な機能の活性化や自然治癒力・災難回避能力等の発達が促されることを含めて、身体的・精神的・社会的に加えて霊的（「霊的」は1998年に世界保健機関で健康の条件として加えることが提案されるも見送りとなった）にもすべてが満たされた真の健康の実現を期待したい。

註

- 1) 醫: 医の古字で、「天と地」そして「自我と真我」をつなぐ意味が読みとれる巫を基礎に、「うつぼ」という器に矢じり（鍼の原型）を入れた形の医と、警蹕けいひつという宗教的御戒おほらいの作法を意味する笏を組み合わせたもの^{1), 2)}。
- 2) 生命の根源を辿ると身体は海（産み= ㇿ + 毎 [→母]）であり、海の砂が固まって産土うぶすなとなりそこから産まれたのが人を含めた土産みやげである。血潮の潮は海水のことであり血が肉となる。三木成夫は潮のリズムと呼吸のリズムの密接な関係のほか人体リズムと宇宙リズムの同調を説いた²³⁾。その海あまの源あまは天であり身近な天が太陽であり月でありその究極の源が宇宙である。地域の母なる大地の神格化が産土神、海・地球の神格化が海原を治める須佐之男命、暦と関係する月の神格化が月読尊、天を照らす太陽の神格化が天照大御神、宇宙の神格化が天之御中主神と神話では表現されたものと考えられる。特に太陽信仰については古代より普遍性があった。
- 3) 阿摩羅識あまらしき：玄奘の有相唯識派では、阿頼耶うそういしきは識あらいやしきの清淨無垢な側面とする「ブリタニカ国際

文献

- 1) 田中 実：究極の医療は円通医療. ルネッサンス・アイ, p.32, 2015.
- 2) 田中 実：生命医療は円の医療ーカゴメ歌の謎解きと医療哲学ー. ルネッサンス・アイ, pp.20-21, 2007.
- 3) 広岡蘇仙著, 伴尚志訳：難経鉄鑑. たにぐち書店, p.304, 2006.
- 4) 小曾戸丈夫, 浜田善利：意積黄帝内經靈枢, p.17, 1980.
- 5) 中医研究院/広東中医学院/成都中医学院編著, 中医学基本用語邦訳委員会訳編：中国漢方医語辞典, p.19, 1980.
- 6) 田中 実：三焦と心包の中西医結合的観点からの理解の試み. 中医臨床, 第38巻第1号, pp.68-71, 2017.
- 7) 永田和宏：生命の内と外, -ヒトは「膜」である-. 新潮選書, pp.17-77, 2017.
- 8) ブルース・リプトン：思考のすごい力. PHP 研究所, pp.120-150, 196-232, 252-295, 2010.
- 9) 安田峯生, 沢野十蔵 訳：ラングマン人体発生学. MEDSi, p.62, p.94, 2001.
- 10) 傳田光洋：第三の脳. 朝日出版社, pp.87-174, 2007.
- 11) 傳田光洋：皮膚は考える. 岩波書店, pp.55-102, 2005.
- 12) 傳田光洋：賢い皮膚ー思考する最大の臓器. ちくま新書, p.184, p.210, 2009.
- 13) 山口 創：皮膚という「脳」. 東京書籍, p.6, p.10, 2010.
- 14) 山口 創：子供の「脳」は肌にある. 光文社新書, p.17, p.26, 174, 2004.
- 15) 藤田恒夫：腸は考える. 岩波新書, pp.1-13, 1991.
- 16) 西原克成：内臓が生みだす心. NHKブックス, pp.17-31, p.92-93, 2002.
- 17) 福士 審：内臓感覚ー脳と腸の不思議な関係. NHKブックス, pp.57-195, 2007.
- 18) 中医研究院/広東中医学院/成都中医学院編著, 中医学基本用語邦訳委員会訳編：中国漢

- 方医語辞典, pp.25-26, 1980.
- 19) 藤本蓮風, 平田耕一, 山本哲齊: 針灸舌診アトラス. 自然社, p.69, 1983.
- 20) 田中 実: 究極の医療は円通医療. ルネッサンス・アイ, pp.252-254, 2015.
- 21) 代田文誌: 沢田流聞書 鍼灸真髓. 医道の日本社, p.6, 2015.
- 22) 広岡蘇仙著, 伴尚志訳: 難経鉄鑑. たにぐち書店, pp.647-661, 2006.
- 23) 三木成夫: 生命とリズム. 河出文庫, pp.130-144, 2013.
- 24) 田中 実: 生命医療は円の医療ーカゴメ歌の謎解きと医療哲学ー. ルネッサンス・アイ, pp.75-78, 2007.
- 25) 田中 実: 生命医療は円の医療ーカゴメ歌の謎解きと医療哲学ー. ルネッサンス・アイ, pp.20-21, 2007.

〔受付: 2019年2月20日〕

〔受理: 2019年5月18日〕